

スポーツを楽しんでいる感覚とはどういうものか。日本人と欧米人とはスポーツを楽しむ感覚、あるいはスポーツをスポーツとしてとらえる感受性が非常に異なっているといえる。

日本人は細やかな動作にも集中していける。それに比べ欧米人は大きな動作に集中することが得意であるという気がする。

たとえば、競技種目ができて欧米人はおおざっぱに種目を楽しむという感じ、日本人はその種目で勝つにはどうするのか。そこを追求して競技する。

その結果、究極の勝利方程式なるものができてスポーツ自体が面白くなるのではないだろうか。するとどうするか。次のスポーツへと移っていく。つまりどんどんスポーツそのものが進化していく図式だ。

ここで登場する、硬式野球。ヨーロッパ地域では今一つ盛んではない種目である。しかし、日本ではそれにささげる情熱はすごいものがある。そこには世界大会で金メダルをとるということよりも、硬式野球をやっている、ただそれだけに価値を見出そうとする。硬式野球は教育の一環であるというのはそのあたりであろう。日本は今年行われるWBC（ワールド・ベースボール・クラシック）に不参加を決めた。過去の2度の優勝国であるのに。そこには大リーグというプロ集団との不平等があるとのこと、これからどうなっていくのか注視したい。

ここで注目したいのは、最近サッカーでもヨーロッパへ移籍している選手がだんだんと増えてきている。しかも、活躍しているのである。これはどうなのか？サッカーはやはり大きな視野に立つての活動、流れ、作戦などがある。その中での日本人選手は、与えられた活動、作戦などをこなすと同時に日本人らしい細かいところの動きが優れている。日本人だけが優れているということではなく、欧米人にも優れた人はたくさんいる。しかし細やかな技術、しなやかな動き、細やかな身のこなしは日本人特有のものである。

2012年、ロンドンOlympicで審判員の判定に驚かされた。まず柔道競技66Kg級 海老沼選手の判定青3本からの判定白3本。体操男子団体の4位から2位。ほっとした結果であったが、もし最初の判定で白が1本でも上がっていたらジュリーは審判員を呼んだらどうか。内村選手の最後の着地が乱れて倒立したかどうかで判定が違ってくる。要するにどこの選手も紙一重であるということだ。負けたほうは気がおさまらないであろう。ああいう状況で審判員を呼んで、その後の判定で覆る。ジュリーの何らかの力が加わったのは明白である。勝ったほうも敗れたほうも後味が悪い結末である。今後このようなことがないようにまず、審判員の目を肥やすことをしなければならない。そしてジュリー

の位置づけを確立したものになければならない。タイムとか測定とかで勝敗が決まるものであれば簡単な話であるが、我々がやっているのは審判員の主観が入ったジャッジである。日本人は細やかな動きにも集中してついていける。欧米人はついていけないことも多い。この話もまんざらでもなさそうだ。